

冬ごめ便り

222号

春版

2017年(平成29年)
4月30日発行

編集・印刷：
馬込便り編集グループ

<題字 故黒田浩子姉>

『忠実なよい僕だ。よくやった。…主人と一緒に喜んでくれ』(マタイ 25:21)

しもじょう ひろあき
司祭 フランシス 下条 裕章

わたしたちの生活は数限りのない選択の上になり立っています。今わたしは人生の分かれ道にあると感じるようなことに遭遇することもあります。決断のほとんどはたぶん、日常の寝起き・生活の中にある小さなものです。その積み重ねがその人の人生を描いてゆきます。今日もまた、わたしたちの前に人生の分かれ道があり、些細なそして大切な決断を迫られています。わたしたちの自由は選択の中にあります。「命を選べ」(申命記 30:19)とおっしゃる神の前で、一つひとつの決断は、信仰の告白また表現であり、信仰者の生きざまを形づくってゆくものとなります。あるいは信仰とは選択であると断言することもできるかもしれません。

イエスが天の国を話された『タラントン』のたとえはよく知られています。新約聖書・マタイによる福音書では、旅行に出かけるとき、僕(しもべ)たちを呼んで、主人がその財産を分けて預けたと記されています。それぞれの力に応じて、あるいは5タラントン、2タラントン、そして1タラントンと。1タラントンは6千日分の賃金に該当する金額だそう。僕たちはそれをもって出かけてゆきます。

やがてかなりの時が過ぎ、主人が戻ってきて精算の時が来ます。5タラントン、2タラントン預けられた者は商売をして多くの利益を手に入れました。そして「ところで、1タラントン預かった者も進み出て言った。『ご主人様、あなたは蒔かないところから刈り取り、散らさないところからかき集められる厳しい方だと知っていたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。ご覧ください。これがあなたのお金です。』主人は答

えた『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら…』(マタイ 25:24~)と、この僕から全ては取り上げられ、追い出されてしまうと話は結ばれます。

これまでわたしは、何人かの方から、この天の国のたとえには納得がゆかないとお尋ねをいただいてきました。いわく、「商売をして、あるいは持ち逃げされて損をしていたらどうするのか。」「地に埋めるのは当時の最も安全は保管方法の一つと聞いている。それがどうして追い出されるほどのことになるのか。」などなど。

1タラントン預かった僕は、主人を「蒔かないところから刈り取り、散らさないところからかき集められる厳しい方だと知っていました。」と言い、主人もこれを否定していません。だとしたら理由は、「恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました」のところにあるのでしょうか。おそらくそうだろうと思います。

この主人 一天の国のたとえですからきっと神を指しているのでしょうか— は、僕の言葉の通りであれば「種を蒔かない所からも収穫を得、畑を広げてもいない所から実りを集めることができる方」です。だとすれば、預けられたものを種とし、畑として用いたときには、それが、蒔かれたものの何倍もの実りをもたらさないはずはないのです。主人をただ恐ろしいものとしか感じ得ない関わりのある方、また預けられた物を委ね用いることを惜しんだところに、この僕の残念な結末の理由を見つけることができるかもしれません。

<3ページへ>





<巻頭言より>

ここで改めて言うまでもありませんが、タラントンという言葉は、タレントすなわち賜物＝神からわたしたちに委ねられているものを意味しています。

神は、わたしたちに恐れられ遠ざけられたいとも、またわたしたちを役に立たない僕として叱責して外に投げ出し、関わりを絶ちたい、とも考えておられません。神は、人びとの全ての営みと決断の実りを常に育んでくださっているのです。

世のすべてのものとともに「一緒に喜んでくれ」とおっしゃるために。主に感謝。